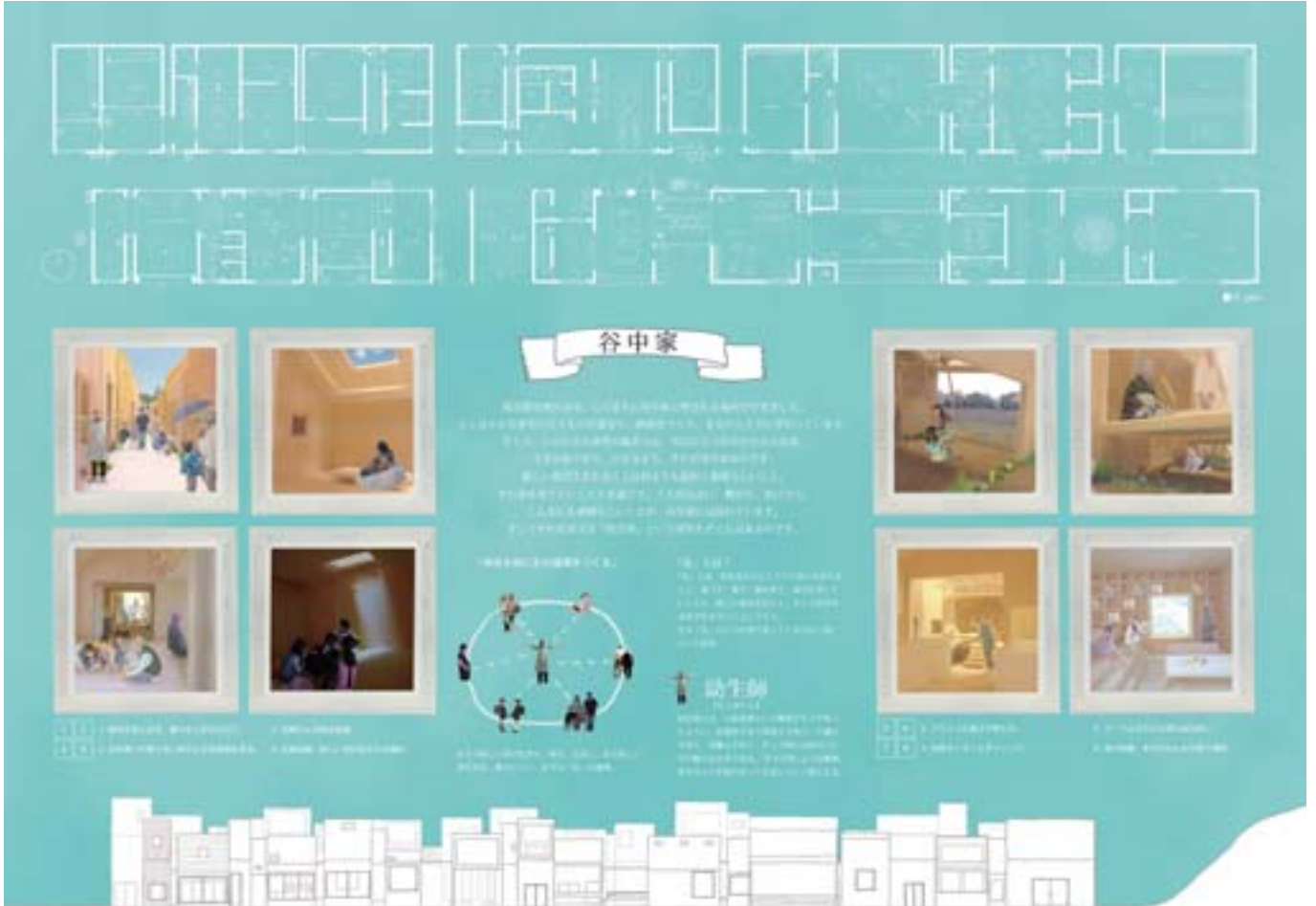


西山 芽衣 (にしやま めい)
千葉大学 工学部 建築学科



社会の変化に伴い、命が生まれ育つ環境も大きく変化した。少子化、お産難民、育児ノイローゼ、育児における経済的負担の増加など、以前とは違った育児の問題がある。また、昨年の東北沖太平洋地震をきっかけに、人と人のつながりの重要性が再認識された。以上を踏まえ、これからの未来に「母性を核にした生の循環」が行なわれる公共施設とまちの母のような職業を提案する。「助生師」という母性を中心として、まちの命が生まれ育ち、また人々がつながる場所をつくる。谷中という町のある路地に、様々なシーンが連続する小さな町のようにあり大きな家のような建築を設計する。



講評

「絆のある暮らし」という最近のメッセージが、平準に思えるほど、胎内性のような不思議な感覚を覚える提案である。と言っても筆者は、胎内性・母性を強く意識したことはないので、論評すればするほど、その価値が下がりかねない、逆に言うと、プリミティブな生き方を問う「そこはかたない」魅力的な提案と言える。

下町谷中には今も「路地の暮らし」があふれている。そこに防災広場を確保したうえで、路地の暮らしを濃密に進化させている。「生き生きと物語る空間」、「まちの母のような「助生師」が育つ空間」、そして「助生師」が育てる空間」・・・新しい時代の暮らしの風景を輪切りにして演出している。

さらに、この風景に額縁を添えて、作者は、絵本や一枚の絵画のように、優しく読み聞かせる。作者の建築へ眼差しと語り自体に「助生」の思いが溢れており、プレゼンテーションに、多くの聴衆が引き込まれ共感した。今後はさらなる新鮮で濃密な「生への空間」を追及していくことを望む。

(審査委員：鳴海 雅人)